

小中生が理系研究発表

福井大「育成塾」テーママジっくり

県内の小中学生を対象に、次世代を担う理数系人材の養成を目指す福井大「ジュニアドクター育成塾」の成果発表会が29日、福井市の同大文京キャンパスで行われた。研究者と研究に取り組んできた1期生9人が、研究成果を披露した。

科学技術振興機構(JST)の次世代人材育成事業の一環で、福井大が県内の教育機関や博物館と連携し昨年8月に開講。小学5、6年生と中学生40人が生物や化学、物理な

どの専門的な講義を聴き、グループ研究に取り組んだ。2年目の今春からは選抜された10人がそれぞれ関心のあるテーマを決め、福井大や福井高専の教員、福井市自然史博物館の学芸員らと研究に励んできた。

この日は、研究概要の説明に続き、一人ずつポスター発表を行った。鶴谷百恵さん(西藤島小6年)は、鳥の翼の形の違いについて研究した。79種類101体の標本の翼の長さや幅を測定し、データ化。

研究の成果を発表するジュニアドクター育成塾の受講生(右)＝29日、福井市の福井大文京キャンパス



海や草原のような開放環境に「ために細長いのに対し、樹木生息する鳥の翼は揚力を得る」の多い閉鎖環境の鳥は障害物

の間を飛びやすいように正方形に近い翼の形になっていることを発表した。「測定を重ねていくと、翼を見ただけで生息環境の見当がつくようになった。ポスターや補足資料をまとめるのは大変だったが、れど、いい発表ができた」と笑顔を浮かべた。

シャボン玉の性質について調べた林理人さん(松陵中3年)は「実験結果から規則性を見つけ出すのに苦労した。研究者と一緒に研究できたのはいい刺激になった」と振り返った。

発表会には、小中学校の教員や2期生の子どもらも参加。発表にじっくりと耳を傾け、研究内容について質問していた。(高村友基)